

報道関係者各位

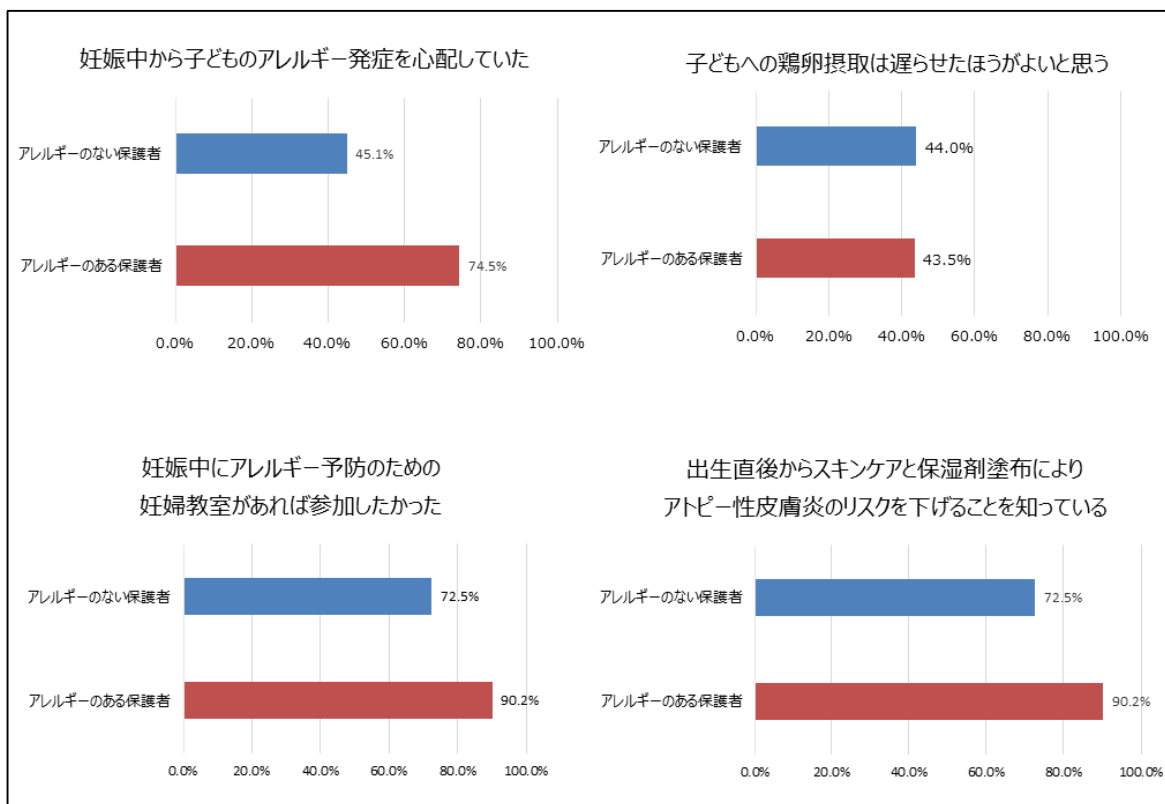
2020年3月3日

国立成育医療研究センター

離乳食で鶏卵摂取を遅らせた方がよいと誤って答えた親は約43%！
 ～妊娠期から正しいアレルギー知識を身に付けることが必要～

国立成育医療研究センター（所在地：東京都世田谷区大蔵、理事長：五十嵐隆）のアレルギーセンター山本貴和子、大矢幸弘らのグループは、保護者が妊娠期間中にアレルギーに関する知識・認識をどの程度を持ち、アレルギー予防に対してどのような対策をとっていたのかをアンケート調査しました。その結果、「離乳食で鶏卵を食べさせることを遅らせた方がよい」と、誤った認識をもった保護者が約43%もいることが分かりました。これは、科学的根拠に基づくアレルギーの情報が、保護者に認知・浸透していない事をあらわします。当センターは今回のアンケート結果が周知され、マタニティクラスなどでアレルギーが取り上げられることで、アレルギーの予防や早期発見、重傷化予防に役立つことを期待しています。

この論文は、アメリカのアレルギー・喘息・免疫学会誌である“Annals of Allergy, Asthma and Immunology”に掲載されています。



【アンケート調査結果（有効回答 185 人）】

【プレスリリースのポイント】

- ・離乳食で鶏卵を食べさせることを遅らせた方がいいと、誤った認識を持った保護者が43.2%もいることが判明しました。
- ・その一方で、ほぼ全ての人（83.9%）が新生児期から保湿剤を塗ることがアトピー性皮膚炎の発症リスクを下げると正しく認識していました。
- ・各自治体などで行われているマタニティクラスでは、栄養や母乳などの基本的な内容が多く、アレルギーに関する内容はあまり一般的ではありません。そのため、アレルギーのある保護者からは、マタニティクラスでアレルギーについて学べる機会があった方がよいという意見が9割を超えました。

【研究手法】

2017年10月から2018年3月までに、国立成育医療研究センターアレルギー科を初めて受診した0歳～2歳の患者の保護者、日本能率協会に登録されている一般モニターで0歳～2歳の子どもがいる保護者、合わせて287人を対象にして、無記名式の質問票調査を実施（有効回答185人）。質問票では保護者や子どもの属性、子どものアレルギー発症に関する不安、アレルギー発症予防に関する認識などについて調査しました。

【今後の展望】

当センターのマタニティクラスでは、アレルギーの専門家が予防に関する話をしています。現在は、妊娠中からアレルギー予防教室を実施することでどのくらいの子どものアレルギー疾患を予防できるのかという研究を進めています。

【発表論文情報】

- ・著者：山本貴和子¹、高山ジョーニ一郎²、齋藤麻耶子¹、二村昌樹³、大矢幸弘¹
- ・所属：¹国立成育医療研究センター、²UCSF Benioff Children's Hospital、³国立病院機構名古屋医療センター
- ・題名：Prenatal visits for allergy prevention
- ・掲載誌：Annals of Allergy, Asthma and Immunology 2020 Feb;124(2):198-200
[https://www.annallergy.org/article/S1081-1206\(19\)31450-4/abstract](https://www.annallergy.org/article/S1081-1206(19)31450-4/abstract)

【科学研究費助成事業】

本研究は、JSPS 科研費 JP17K13214 の助成を受けたものです。

【問い合わせ先】

国立研究開発法人 国立成育医療研究センター

企画戦略局 広報企画室 村上・近藤

電話：03-3416-0181(代表) E-mail: koho@ncchd.go.jp